

七月号

田園

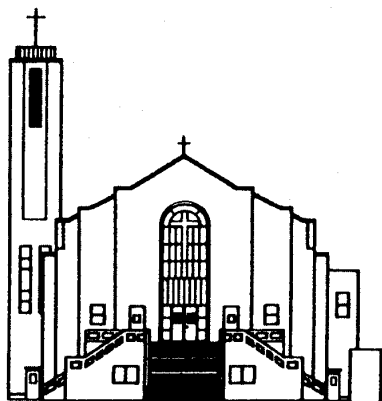
聖フランシスコ カトリック田園調布教会

(No.705. 2022.7.1)

カトリック田園調布教会報

☎03(3721)7271

〒145-0071 東京都大田区田園調布3-43-1



新しいミサの式次第の変更箇所

助任司祭 アウグストヌス桑田拓治神父

二〇二二年十一月二十七日待降節第一主日
日から現行のミサ典書に変わって新しく改訂されたミサ典書を使用することになります。今回の巻頭言ではその背景について書きたいと思います。

第二ヴァチカン公会議の後、トレント公会議から四百年間使われてきたミサ典書が刷新されることとなり、一九七〇年「ローマ・ミサ典礼書」のラテン語規範版の初版が出されました。この規範版は一九七五年二〇〇二年と二回改訂されています。

第二版はマイナーチェンジであり、第三版では新しく列聖された聖人達のミサ祈願文、色々な機会におけるミサの祈願文が追加されました。

現在日本で使われているミサ典書は一九七

五年第二版の暫定訳にあたります。

今回改訂される日本語のミサ典書は二〇〇二年の第三版に基づいた翻訳になっています。ミサ典書の翻訳に関しては教皇庁典礼秘跡省の認証を受ける必要があります。

二〇二一年五月二十三日聖霊降臨の祭日に典礼秘跡省から、「ミサの式次第と第一く第四奉献文」「ミサの結びの祝福と会衆のための祈願」「水の祝福と灌水式」の認証を受けることが出来ました。しかし、「公式祈願」「叙唱」「入祭唱」「拝領唱」の改訂作業は終わっていません。

従って、待降節第一主日からは認証を受けた式次第に従い、認証を受けていない部分は現行の祈願文を用いることとなります。

カトリック中央協議会に問い合わせたところ、以上のことを踏まえた上での「司式者儀式書」の出版は九月頃を目指して準備中とのことでした。

正式なミサ典礼書の出版は全文の認証を受けてからのことになるとのことでした。第二版と第三版においてミサの中心部分の改訂があつたわけではないので、今回の改訂版は基本的に翻訳の見直しであると言えます。

翻訳において難しいのはラテン語の単語と日本語の単語が一对一対応になっておらず、単語の意味する範囲のずれが存在していることです。ミサの式次第の言葉が変わったとしてもミサの本質が変わったことはありません。

常にミサは祭壇を中心とした聖体祭儀であり、感謝の祭儀です。その意味では新しい翻訳になれる必要があると思います。

天使祝詞からアヴェ・マリアの祈りへの移行の時の戸惑いを思い出しますが、繰り返し祈るうちにその祈りを自らのものと出来ていったのも事実だと思えます。



現在はコロナ感染防止の観点からミサの中での応唱は心の中で唱えることになっています。

十一月二十七日の時点でのコロナ対策がどうなっているかは分かりませんが、司祭と先唱者との応唱に耳を傾け改訂されたミサの応唱の言葉を心に染みこませていくことが大切だと思います。

繰り返しになりますが、ミサの本質が変わりが無いことを心に留めて下さい。

ドミニコ竹内正美神父様

司祭叙階五十周年のお祝い

文 鶴原 陽子

(フランススコエ一粒会)

去る三月二十日、十一時のミサで、ドミニコ竹内正美神父様の司祭叙階五十周年をお祝い致しました。フランススコエ一粒会から、バラの花束を贈呈致しました。



記憶されている方もいらっしゃると思いますが、七年前の二〇一五年にも金祝のお祝いをさせて頂いております。あの時は神父様の初誓願から数えた五十周年でした。

一九七二年の叙階から、半世紀。ミサを挙げることを最も大切にし、私たち小教区の信徒のために人生を捧げて下さっている竹内神父様に、改めて深い感謝の気持ちを伝えるお伝えしました。

そして、田園調布教会の主任司祭になられてからも、はや十七年！ 素朴で時にユーモラスな神父様とお話ししていると、自然と穏やかな気持ちになれる方も多いのではないのでしょうか。



今後とも更なる霊的ご指導をお願いすると共に、神父様のご健勝をお祈り致します。

復活祭の洗礼式

おめでと〜うございます！

文・写真 カテキスタの会

四月十七日の復活祭の午後、大聖堂で十名の方が洗礼と堅信を受けられました。

例年なら前日、復活徹夜祭でミサの参列者に見守られて洗礼式は行われるはずですが、今年もまだ人数制限されているので、復活祭の午後に分けて行われました。



この一年間、コロナ禍による教会活動の停止や多くの制限の中でもカテキスタによる入門講座と神父様によるまどめの講座を熱心に受講された方々がご家族、友人に見守られて受洗のお恵みを受けて田園調布教会のお仲間に入られました。



これから共に歩んでまいりましょう。皆様よろしくお願いいたします。

元和キリシタン殉教碑と

一条戻り橋(京都)

文・写真 柳沢洋子

今、少しずつ旅行の解禁に向けて進んでいるようですが、私は三月末に京都の鴨川沿いを自転車で行きたくて、ひっそりと出かけました。街中は人が戻りつつありますが、川沿いや道を選べば、空いている所をすいすい走れます。いつもは多摩川沿いを自転車で行っているのですが、鴨川は水辺が近く、気持ち良いのです。

その鴨川も三条から七条にかけての河原は昔、刑場であり、記録の古いものでは平将門から近代では近藤勇まで、斬首、さらし首など、人目に付くところで見せしめとする場所でした。

今は河原もきれいに自転車や散歩道が整備され、川堤は南北を通る交通量の多い道になっており、処刑場だったなどと言うことは微塵も感じられません。

六条付近の正面橋ほとりは一六一九年十月六日に五十二人の信者が磔になった場所、一六二二年九月十日の長崎の大殉教、一六三三年十二月四日の江戸の大殉教とともに元和の三大殉教と呼ばれています。

これらの大殉教につながるキリシタン禁令の徹底は徳川の威光を示すため、信者の多さもあって外国にむけての長崎、徳川のある江戸の入り口、そして徳川以前の日本の中心であった京都での見せしめとされたのでしよう。



江戸の大殉教に関しては、二〇一九年「田園」十一月号にカトリック高輪教会主催の江戸殉教者の道を歩く巡礼に参加した話で書かせていただきましたが、その後はコロナの影響で沢山の人が集まって歩き巡礼をするなど考えられない世の中になってしまいました。

京都の五十二人の殉教者は一月に捕らえられ、十月までは過酷な牢生活の後、市中引き回しの上、二、三人ずつ十字架に縛られて、火をかけられました。ただ一つ、江戸との違いは、早く燃え上がるように薪をうず高く積んだと言う点で、江戸のように長く苦しむようにと藁で火をかけたのではありませんでしたが、それでも耐え難い苦しみには違いありません。

殉教の地には一メートルくらいの石碑が、交通量の多い川端通りの歩道の脇に建てられています。



あまり目立たないので、道路脇に設置されている分電盤かと思間違えるようですが、この碑の下には五十二人の名前を書いた赤いバラの花のリボンが白い壺に入れて埋められているそうです。



この元和の大殉教に先立ち、一五九七年二月五日には長崎で二十六人が殉教しています。その内二十四人はカトリック西陣教会からすぐの一条戻り橋で耳をそがれ、厳しい冬に京都から長崎まで裸足で歩かされました。(道中、イエズス会とフランシスコ会の世話をしていた二人が加わる)その

一条戻り橋付近も、これまた交通量の多い堀川通で、心の目で見て、思いを馳せるしありません。西陣教会にも立ち寄りませんが、平日の昼間でどなたもいらつしやらず、コロナの今、戸締りも厳重で、残念でした。



【 一条戻り橋と西陣教会 】

日本は古代ローマに次いで殉教者が多い国だそうです。

東京教区ニュース五月号の菊池大司教の巻頭言の中にあるように、二〇二二年九月から二〇二三年十二月までの十五か月は「愛のあかし・元和の大殉教四百年」とさだめられ、「殉教者の霊性を学び、ともに祈り、殉教者の生き方に倣う」ことを呼びかけられています。

いつも殉教地に立つと、弱い信仰しか持てない自分を恥じるばかりです。

せめて来日された教皇様が長崎で言われたように、「日々黙々と務める働きによる『殉教』を通して、すべてのいのち、特にもつとも助けを必要としている人」のために自分が何を出来るかだけでも考え続けたいと思います。